〔徳島県立文学書道館紀要「水脈」第六号（二〇〇七年）掲載〕

抵抗と崩壊、そして微かな曙光への道程

昭和という時代に生きた作家貴司山治展・補遺

伊藤　純

一・まえおき……昭和の残映

遠いある夏の夜の記憶が、不思議な断片となって残っている。今思うとそれは五歳くらいのことである。七月の夜の生暖かく湿った空気の匂いだけが、なぜか記憶の奥底にある。その時私の家族は、食事の後で、やや大きめの食卓を利用してピンポン（今見るような正式のものではない、狭いテーブルでできるおもちゃのピンポンセットだ）に興じていた。その最中にだれかが、多分ラジオのニュースを聞いたのだろう。「支那と戦争が始まった」といったのである。

あとも先もない、幼い頃のただそれだけの記憶だ。今思えばそれが昭和十二年七月七日、盧溝橋事件の夜のことだったのだろう。

ただ、戦争が始まった、といったのは父親ではない。その時父親は、淀橋警察署の留置場に長期拘禁され家にはいなかった。おそらく、親戚か知人かがきて、久々の賑わいでピンポンなどして幼ない私ははしゃいでいたのかもしれない。

その後の戦争の記憶は、次第に激しいものになる。なにしろ、吉祥寺の自宅は太平洋戦争中米軍の本土爆撃の重要ターゲットだった中島飛行機武蔵野工場（当時日本最大の軍用機工場）から二キロほどしか離れていないのである。東京市街地の焼夷弾爆撃に先立つ昭和十九年の秋（サイパンからの本土空襲は一九四四年十一月二四日、この中島への爆撃から始まった）からB２９の大編隊は中島飛行機工場に無数の一トン爆弾を投下した。だから、爆撃が始まると数十分は、すさまじい爆弾の落下音（風を切るザーッというような轟音）と地面を波打たす爆発音が切れ目無く続いた。

そして疎開した丹波山中で、戦争は突然終わった。駐屯して山中で穴掘りばかりしていた五十人の兵隊の軍歌と号令がある日突然静まり、付近は無限の静寂に包まれた。あの、暑い夏の日のホッとした安堵感は今も思い出すことができる。

「昭和という時代に生きた作家・貴司山治展」（平成十八年十二月～平成十九年一月徳島県立文学書道館で開催）のコンテンツ作りに取り組んで、私はほとんど“強制的に”昭和という時代をもう一度概観することを迫られた。見直せば見直すほど、それはただごとならざる“動乱”の一時代だった。ことに、昭和初年から昭和二十年の太平洋戦争敗戦に至る二十年間は、自ら奈落へ駆け込んでいくように、国民挙げて戦争と崩壊に突進していった……幕末維新や戦国末期に匹敵する、一つの体制が崩壊していく途方もない時代だった。幼い記憶

は、その歴史の端々に辛くもひっかかっている。

二・「貴司山治」とは何だったのか？

貴司山治（伊藤好市）は明治三二年（一八九九年）十二月二二日、徳島県鳴門村の高島に生まれた。もっともこの生まれた日の正確性は疑わしい。というのは、母親が出生届を出しに行ったとき、実際は既に出生から十日以上も過ぎていて、このままでは罰金を課されると注意され、罰金を払うのは馬鹿馬鹿しいというので、届けに行ったその日を出生日にしてしまったというエピソードが記録されている。貴司の役人嫌い、公権力嫌いは既に親の代から始まっていたのかもしれない。

しかし、今、ことあらためて“貴司山治”といってみても、あまり知る人はいない。生まれ里の高島でさえ、知る人は少ない。

ただ、その貴司にも全国的な有名人だった時期が二度だけある。

最初は昭和三年～十年頃、プロレタリア大衆小説家として全国紙に連載小説を書いたり、キングや講談倶楽部などの大衆読み物雑誌の売れっ子作家だった時代である。

第二の時期は、昭和十六年～十八年頃である。貴司はプロレタリア文学の世界から転向後、大衆時代小説作家に転身し「維新前夜」をはじめ多くの時代小説を新聞や大衆雑誌に書いた。

しかし、そのころからもう半世紀をはるかに超える年月が過ぎてしまい、それらのこともほとんど忘れ去られた。そして今更、貴司という個人を回顧してみても始まらない、というはるかに隔たった“今”という時代に我々は生きている。

ただ一つ、気がかりなことがある。それは、貴司が“全国ブランド”だった時期が両方とも、あの“昭和動乱”の時代……昭和初年から二十年に至る戦争と崩壊の時代に含まれているということである。つまり貴司は、私にとっては幼小児の片々たる記憶でしかないその波瀾万丈の時代を、一人の人間として生きたということである。

もちろん、貴司だけでなく何千万という人々がこの時代を生きた。ただ、貴司はたまたま小説書きであり語り部だった。そこで、時代とおのれの生き様を文字に書き残した。今、ことあらためて貴司を回顧し検証するとすれば、語り部として、時代の証言者としてのその役割に目を向けていくべきだろうと思う。

三・出郷――　鳴門の青年たちを突き動かした時代の風

大正九年、二十歳の時に貴司は故郷を捨てて大阪に出て行く。おそらく“捨てて”という表現は比較的当を得たものだと思う。後年書いた「長編・地下鉄」という未完の小説のはじめの方で、都会に職を得て故郷を出て行く青年を描いているが、出て行く港も見送る家族も、貴司をめぐる環境そのままである。そして、その青年は――

「ゼニハ、モウカラナクトモヨイカラ、リッパナ人ニナッテクダサイ」

という妹の手紙に「いつの間にか自分が非常に堕落しているように思われ」て、船の欄干に突っ伏して泣くのである。

実際貴司には、当時病身の弟を含む四人の家族がいた。さらには、鳴門の高島には夜ごと時局を論じ夢を語り合う仲間がいた。その筆頭は福永豊功という独学のマルキストで、指導者としてのカリスマ性ももった青年である。この高島の青年たちの青春の熱気渦巻く雰囲気の一端は、四十年後に高島在住の郷土史研究家・岩村武勇氏に書き送った貴司の手紙*に書かれている。

「……私と福永との交友は大正三年ごろ、私が小学校を終わって米沢次男などとつきあって高島青年団というのをつくり、ヤマハ（今の三島君の向かい）にカンバンをかけ、毎晩のように寄り合って気勢をあげているころ、伊吹弥一郎らが別に実業青年団というのを作り、福永はこの方のメンバーでした。両者談合の会を催し、役場の公会堂か、今の高橋の向かいの横須賀か元木の空き家か、で両者会合したことがあり、その時に知り合ったと思います。二人とも空名ばかりの青年団がバカバカしくなり、二人だけの交際となったのです。三日に一度、やがては二日に一度、又は毎晩のように、互いに行ったりきたりしている間に、福永は十七歳で高島塩田労働組合長となり、私は村役場書記補一年（月給八円）、産業組合書記一年（同十五円）という風になり、福永が長谷川如是閑の「我等」「批判」などを持ってきて私にみせ、私は賀川豊彦の影響で社会主義をおぼえ、河上博士の「社会問題研究」（月刊）をとっていたので、それをみせて「如是閑ぐらいではあかん」と福永をやっつけたものです。（十八、九歳）

そうこうするうち、大正九年（二十歳）八月末、私が出郷して大阪へ行くことになり（福永は）そのセンベツに堺枯川訳の「共産党宣言」ののっている赤い表紙の薄い雑誌（題号忘失）、大阪平民新聞（一号から十号迄**）を持ってきて「これを自分が持っていては危険なのであんたに上げる」といってよこしたものです。」

＊　この手紙（岩村武勇氏宛昭和四二年八月二六日付け）は徳島文学書道館収蔵。
＊＊　この大阪平民新聞の現物も徳島文学書道館に収蔵されている。

さらに驚くべきことに、このような高島の青年たちのコミュニティを背景として、極めてユニークな政治綱領を掲げて衆議院議員に立候補する人物まで現れる。当時高島の青年たちのための「八珍クラブ」という奇妙な名前の一種の文化クラブがあった。たまり場の事務所があり、雑誌を共同購入して回覧したりしていたらしい。そしてそのスポンサーが高島塩田の開祖である篠原家の血筋の弥（わたる）氏だった。前掲の貴司の岩村氏への手紙では――

「……八珍クラブの何よりの文化史的意義は大正九年五月十日の第十四回衆院総選挙に際し、篠原弥氏を立候補せしめたことです。……篠原氏は「満二十一歳以上の男女に選挙被選挙権を与えよ」というスローガンをうたって立候補しました。」

この立候補自体は素封家の道楽とも売名行為とも取りざたされて周囲は戸惑ったらしいが、その立候補スローガンの開明性は相当なものである。男子普通選挙制の成立に先んずる

こと五年、女性参政権にいたっては敗戦後ＧＨＱ指令で漸く認められたのだから時代に先行すること二十五年ということになる。

このようなさまざまなエピソードを見るにつけ、私は、大正後半から昭和初期という時代を我々はもう一度見直す必要が有りはしないかと感じる。戦前の日本というと、専制とファシズムの暗い時代とおおざっぱに要約してしまいがちだけれども、一色に見てしまうと、その時代に生きた人々の思いを見落とすことになる。大正時代の再評価は、戦後、実証的研究が大幅に進んだが、それらのことを実際の村や里の青年たちの思いとしてつかみ直す必要があるだろう。

高島という、都会を遠く離れた島里にも、新たな人間観、新たな思想、自由主義、民主主義（民本主義）、社会主義、そして豊かな生活と文化を渇望する“夢”の風が吹き込んでいたのだ。

明治時代の辛酸を脱して、日本は、豊かで近代的、民主的な立憲君主制の“近代国家”になれるのではないか、という夢が人々をとらえた、そういう時代が実際にあったのではないか。……実はこの夢は、昭和に入って急激にどんでん返しをくらい、いわば全否定されるに近い結末を迎えるけれど。

ともかく、貴司はこのような時代の風を背に受けて、生まれ里を“捨て”、夢を語り合った仲間を“捨て”て、一抹の後ろめたさを抱きながら、当時としては東京よりもナウイといわれた「阪神間モダニズム」の花咲く大阪へ出て行ったのである。

四・不稔に終わった「芸術大衆化論争」

鳴門を出て四年間の新聞記者生活をすごした大阪は、貴司自身が「第二の故郷」といっているように、多くの語るべきエピソードがある。すなはち――

①鳴門塩田争議で重要な指導的役割を果たした共産党系労組全国組織「労働組合評議会」は当時大阪に本部があり、貴司は直接本部を訪れたり時には会議を傍聴したりしたこともあったらしいこと。

②そういう“左翼系”のことだけでなく、船場の金持ちで超趣味人の江原金兵衛氏との交際を通してグルメと写真趣味を叩き込まれたこと。

③その金兵衛氏が講師をしていた大阪割烹学校に文化部記者の取材というには深入りに過ぎるほど“いりびたり”、そこの生徒で金兵衛氏の義妹に当たる茨木の地主の娘奇二恵津子と恋に落ち結婚するに至ること……などなどである。

これらは今回の企画展示では割愛したが、正に“阪神間モダニズム”という切り口で、谷崎潤一郎の「細雪」もかくやという面白いモチーフが展開できるかもしれない*。それはそれとして――

＊　大阪時代周辺のことについては徳島文学書道館紀要「水脈」２００８年掲載の拙稿「貴司山治」はなぜ「きし・やまじ」か」で触れた。

大正十五年、貴司は心密かに社会主義に連なる大衆作家を志して、第二の故郷大阪を去り、東京へいく。そこで大衆的な読み物作家としての日々を過ごす中で――

「……「新恋愛行」（東京時事新報の懸賞入選作）以来二、三年の間にずるずると普通の大衆作家になりかけた時、「これではいかん」と煩悶し、評議会に原稿料の一部を寄付することから、私の初一念（労働運動や社会主義を助けたいという志）の実践がはじまったのである。

（そして昭和三年三月十五日の共産党や左翼労働組合に対する全国的大検挙のあと……）

……四月十日すぎに東京大森の自宅に帰ると、すぐに辛くも検挙を逃れた野田（野田律太・評議会委員長）が訪ねてきて「東京の（三・一五検挙での）やられ方は大阪以上で、評議会、労農党、無産青年同盟の三団体が解散させられた」と話し、「ぼくは何もすることがなくなって、暇で困る」という。その頃、プロレタリア大衆文学の創造ということを考えていた私は、労働者の組織が潰滅状態となっている時、その恢復に何らかの意味で役に立つ労働者のための読み物を、プロレタリア大衆小説として書いてみようと考え始めていた。それで、「それなら今まであんたの労働運動の経験で未組織の工場に労働組合をつくるやり方を、小説として書くから、その話をして下さい。材料費として百円あげましょう」と提案した。かれは喜んで、小説のタネとなるような話をいろいろした。そして、左翼組合のオルグないし共産党員が、未組織工場へもぐりこんで、いかにそこの労働者の階級意識を目ざめさせて行くかという実例を、五つも七つも私に話した……」（遺稿「私の文学史」第五章第二節*から）

＊「私の文学史」　掲載webサイトは下記
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/bungakusi/bun1/framepage.htm

というような経緯で、貴司のプロレタリア文学の代表作となる「ゴー・ストップ」*が書かれることになる。

＊「ゴー・ストップ」復刻全文は下記サイトに掲載
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/go-stop/gostop-honbun/gostop1.htm
また復刻本刊行、詳細は下記サイト参照
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/syokai/gostop.htm

ただ、貴司の姿勢は当時の“正統”社会主義者とは非常に違っていた。貴司は社会主義的ないろいろな活動を一般の人々に面白おかしく物語って楽しんでもらうことが主眼で、“副産物として”社会主義に少しでも興味を持ってもらえればそれでいいではないか、と考えていた。だから、貴司は社会主義を既に理解しているインテリなど相手ではなく、大衆読み物にしか接していないたくさんの人々こそ語りかける値打ちのある読者層なのだと確信していた。

したがって「ゴー・ストップ」も面白さを狙った波瀾万丈の物語として書かれていた。――東京下町の硝子工場に、帝大出の社会主義者が潜入し、そこに働いている人々のうっ積し

た不満を手がかりに労働組合を組織し、ストライキにまで展開する過程を描く。恋あり涙あり暴力あり殺人あり、そして神出鬼没の英雄ありの、今でいえば劇画小説といったところだ。

ところがこの「ゴー・ストップ」は正統派社会主義者には非常に評判が悪く、貴司は批判と非難の矢面に立つことになり、数次に及ぶ「芸術大衆化論争」*が展開される。当時プロレタリア文学の中心組織は「日本プロレタリア作家同盟」だったが、その幹部の面々が最も非難したのは、実力行動主義の英雄鳥羽についてだった。確かに鳥羽は人間業と思えない神出鬼没で争議団を支援し、経営者に雇われて組合に暴力的介入を繰り返す暴力団の親分を刺殺するのに始まり、警官に追い詰められて飛び込んだ隅田川では偶然鳴門塩田争議の時の知り合いの船に助け上げられる。かと思えば、見も知らぬ銀座のバーの美女からすごいセックスサービスをうけ、挙げ句巨額の逃走資金を恵まれ、最後は取り囲む警官隊にピストルを放っていずれへともなく去っていく……。　批判者たちは、こういう人物設定はきわめて不自然だしテロ肯定の描き方もけしからん、というのである。

＊“貴司を被告とした”いわゆる「芸術大衆化論争」については、拙稿「プロレタリア文学と貴司山治――「私の文学史」をめぐって」第五章「芸術大衆化論争とは何だったのか」参照　掲載サイト下記
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/tuite/

正統社会主義者はもっぱら「社会主義」の本義で大衆を教化し、目覚めて運動に付き従ってくる選ばれた人々を大切にしょうとした。例えば昭和五年の作家同盟第二回大会「芸術大衆化に関する決議」では――

「我々の芸術は……プロレタリアートの独裁を目標として進みつつある日本の革命的プロレタリアート（これは検閲を考慮して間接的な表現になっているが当時の日本共産党を意味する・筆者注）のイデオロギーを内容とする……その点に関しては何らの妥協も許されない。芸術大衆化の唯一の目的は、広汎な労働者及び農民大衆の中に、この革命的イデオロギーを浸透せしめることに外ならない…」

と述べられていて、共産党の考え方を教え込むことが芸術の唯一の役割だ、とまで極言するのである。さらに、

「前衛の活動を理解させ、それへの注目を呼び起こすような作品……」

「……『面白さ』とは、題材の、深く印象されねばならぬ点が、如何に力強く、正確に読者の関心をつかんだかということ以外にない……」

と作品の質、面白さにまで極めて生硬な政治主義的美学を強制している。

貴司は後年、自叙伝的な遺稿「私の文学史」の中で、つらい現実を飛び越えていく英雄、偶然に支えられて飛躍するストーリーというものが大衆読みものには必須だと述べている。現実のつらい有様をただその通りありのままに書いても、そんなしんどい話はだれも面白みを感じない、というわけである。

この「芸術大衆化論争」は、もしこれが正統な文学論争として深化されていれば、日本の近代文学に深く絡む私小説の袋小路――日本の近代文学の伝統にたいする興味深い論議に発展していったかもしれない。しかし、この論争も昭和十年まで四次にわたって繰り返された

ものの、次第に貴司と徳永直の個人的言い争いのようなものになり、やがて弾圧と戦時体制の大波の中に埋没してしまった。

貴司は早い時点で衆寡敵せず、批判に答えて英雄鳥羽の行動などをごく当たり前の話に書き直したつまらない改訂版（貴司が入獄していたので徳永直がリライトした）を承認し、それが何故か戦後の三一書房版でも維持されている。

＊　この、初版と改訂戦後版の異動は作品の本質の上でも非常に重大だと思われるので、今回初版に戻した復刻版を刊行した。

五・プロレタリア文学崩壊後の「文学案内」「地下鉄」の仕事

立憲政治、民主主義（民本主義）社会主義といった夢が人々の心を沸き立たせた時代は、しかし、ごく短かった。大正デモクラシーを象徴する吉野作造の論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」が中央公論誌上に発表されたのが大正五年だが、それから十年余、昭和二年になると時代は急変する。田中義一内閣によって普通選挙実施と引き替えに、治安維持法改悪、三・一五事件、中国山東半島出兵という政治の画期的右旋回がなされる。これ以降、“左翼”は捕まり拷問されるのが当たり前、という流れが顕在化する。

後知恵ではなく、同時代にすでにこの重大な時代の岐路を見通した人もいた。

戦後読売新聞社主にもなった自由主義ジャーナリスト馬場恒吾は、当時出版された「政界人物風景」（中央公論社一九三一刊）のなかで――

「現内閣を組織している田中（義一）首相及びその閣僚は、彼等自身ではそのやっていることが何であるかを知らぬであろう。しかし我々は恐れる。彼等の行為は、過去五十年間にわたって日本人が努力して築きあげ来る立憲政治に一つの区切りをつけ、日本の政治的発展に方向転換をなさしめるものではないか。」

「我々は自由な明るい政治を持つ方法として、議会の発展に希望をつないできた。然るに普通選挙の実施を一段階として、現在の政府は反動政治の幕をきっておとした。明るい政治は暗い政治に方向転換した。我々はこれより、もっとも陰鬱にして危険なる、絶望的にして不愉快なる時代を経過せねばならぬかの予感におそわれている。」

と述べており、時世は正にその予言の通りに進行していった。

このような時代の趨勢の中で、プロレタリア文学は“年表的”にいえば昭和九年に崩壊した。この年の二月に、二度目の長期拘留で杉並警察署に留置されていた貴司の留守宅でひらかれた拡大中央委員会による悲鳴のような解散声明を残して、プロレタリア作家同盟は消滅する。曰く――

「…我が同盟の活動的作家たちは、…機関誌発行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによって、絶対多数を以てそれへの不信を表明しつつあり…過去の極左的欠陥の克服を以てしても、従来の形式はもはや作家をつ

なぎとめ得ない。…して見れば、かかる組織の維持は意味をもたぬ。……」

貴司はこのプロレタリア文学終末期前後、ほとんど運動体としての組織も失われた時代に、最後の抵抗ともいうべき二つの仕事をしている。一つは文学愛好者のための良心的な雑誌という狙いの「文学案内」刊行であり、もう一つは昭和七年に起こった東京地下鉄のストライキ（いわゆるモグラ争議）をその関係者から取材して長編小説にまとめようという仕事だった。

後者の地下鉄争議の調査と小説化の仕事は、戦後執筆された「一九三三年」*という小説にその一端が書かれているが、東京の下町、花川戸の大きな倉庫に付属した一室を借り、モグラ争議をリードしクビになった共産党員たちを探し出し、面接して詳細な話を聞くという形で実行されたようだ。この時取材に協力した人々の中には後に画家柳瀬正夢夫人となった松岡朝子さんや戦後婦人運動のリーダーになった松崎浜子さんが含まれている。

＊ 小説「一九三三年」は下記サイトに掲載
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/1933/1933-honbun.htm

この取材ノートは四百頁に及び、今、合本となって保存されており、ＤＶＤ出版として公開する予定であるいる。*

＊ ２０１１年1月、不二出版(株)から「貴司山治全日記」とともに刊行予定。

この取材に基づいて構想された小説「長編・地下鉄」は――

第一章「出郷」　昭和九年十月・中央公論
第二章「労働者第一課」　昭和九年十一月・文化集団
第三章「青服（前）」　昭和十年二月・文学評論
第三章（続）「青服（後）」　昭和十年三月・文学評論

までが作品となっているが、これ以降はない。

＊ これも前記ＤＶＤ版に収載の予定。

前者の「文学案内」は昭和十年七月創刊され、昭和十二年四月、貴司が三度目の長期拘留で不在の中、遂に資金尽き二十二冊を刊行して終わった。*

＊雑誌「文学案内」は二〇〇五年秋、不二出版(株)から復刻刊行されている

「文学案内」は、作家同盟解散後の孤立した事態の中で転向を声明し、「……とにかく何程かの作家として自分を生かして行くために、合法的な範囲にまではっきりと自分の文学上の仕事を退却させることに考えをきめた」（昭和九年三月二十六日の日記）という前提で用心しながら始めた仕事だった。寄稿者や協力者は作家同盟以来の中野重治や徳永直、江口渙といった人々の名も見えるが、それ以外、志賀直哉や徳田秋声など幅広い人々が登場している。直接社会主義に言及するようなテーマも慎重に避けられている。ただ、働くものの立場に立つ文学、という枠だけが残された。

元来貴司はジャーナリスト、啓蒙家という側面を強く持っている。「文学案内」はその性格が良く反映していて、創作だけでなく、インタビュー記事とか紹介、解説記事などが非常に多い、正に文学入門者への案内・情報雑誌といった趣もある。中国や朝鮮の小説や文学事

情を毎号のように載せているのも大きな特徴である。

その最たるものが昭和十一年九月の魯迅の寄稿「忘却の記念のために」であろう。これは当時上海に住んでいたかっての作家同盟メンバー鹿地互に頼んで寄稿してもらったもののようで、鹿地の翻訳によって掲載されている。それは、魯迅周辺の何人もの青年作家が蒋介石のテロルによって虐殺されるという危機的な状況の中に生き続ける魯迅の、ほとんど鬼気迫る思いを綴った文章である。その終わりの部分は――

「年老いたもののために記念を書くのではなく、この三十年の間に、却って私はあまたの青年の血を眼にし、それは層層と積み重なって来て、私を埋めて息もつけなくしてしまい、私はただこのような筆墨を用いて幾句かの文章を書くことが出来るばかりだ。……」（鹿地互訳）

という悲痛な言葉で締めくくられている。それは究極の状況に追い詰められつつあった貴司の思いと一脈通じるものがあったかも知れない。

昭和十二年にはいると貴司は拘禁され、一年留置場に放置される。あげくが検事局の取り調べで

「……文学案内の仕事が全部共産主義の啓蒙運動ということになった。……自分も文学案内社の仕事で実刑に問われたとしても、今の日本では仕方のないことだろう。」（昭和十三年五月四日の日記*）

＊　関西大学国文学会紀要「国文学」86号45頁

と覚悟せざるを得ないところまでいく。この、正に“陰鬱にして危険、絶望的にして不愉快”（前掲の馬場恒吾の言葉）な状況は、「愛染」*という小説にも書かれているが、貴司は結局、かっての知友で今は右翼に転じて羽振りのいい高級官僚にわたりをつけて、なんとか起訴猶予となる。

＊　小説「愛染」は小説集「丹波アリラン」に掲載、詳細は下記
http://www1.parkcity.ne.jp/k-ito/syokai/ariran.htm

世に出てみれば、既に日中戦争は始まっており、文学案内社は跡形もなく、世の中の空気も色もすっかり変わってしまっている。貴司はこれ以降、もうあのプロレタリア文学の世界に立ち戻ることはなかった。

二十年ほど昔、鳴門高島で灯がついた夢の一つが、ここで終わった。一つの時代が終わったのだ……つらい終わり方だと思えるけれど。

六・その後のこと――敗戦と微かな曙光

その後、貴司は昭和十六年からほんの数年、大衆時代小説作家としてもてはやされる時期を迎える。しかしそれも戦争と敗戦という大波の中に呑みこまれてしまう。もはや原稿で食う場所も無くなり、敗戦直前には総てを捨てて丹波山中に“開拓農民”として移住する。

この丹波での、敗戦直後の混乱を極めた状況から「丹波アリラン」という小説が発想され

る。貴司の作品を「プロレタリア文学」と「それ以外」に二大別したとき、前者の代表作が「ゴー・ストップ」で、「それ以外」の代表作がこの「丹波アリラン」になると私は思っている。

＊「丹波アリラン」とそれにいたる崩壊期のいくつかの作品は「小説集・丹波アリラン」として最近一冊の本にまとめ刊行した。

小説「丹波アリラン」に登場する人間たちは、まるでチェホフの小説の人物のように、みんなどこかおかしい“疵物”である。開発営団の小役人は「ナマコ」「ブタ」とまで形容される無能、無神経、強欲、ゴマスリの肉塊でしかないオッサンだし、飯場を営む朝鮮人は傲慢と卑屈をないまぜたイヤな男だ。夫を戦場に取られた寡婦は半ば狂乱し、その息子は草を食んでいる飼い牛の舌をカマで切り払い、牛は小屋にこもって血まみれで呻いている。飢えをしのぐために今まで何かと助け合ってきた一番気心の通じあえた開拓の同輩も、今は終戦利権に目の色を変えて別人のようになっている。

要するにこの小説で目に付くのは、深い人間不信と苛立ちである。それは、あの一九三三年以来の崩壊の歴史の中で増殖されてきた抜き差しならぬ人間観であろう。

ただ、「丹波アリラン」には、その不信を越えようとする微かな曙光のようなものが感じられる。それは一人の朝鮮人親方によって暗喩される。その男は、究極の飢えにさらされながら決して盗みもしようとせず……いや、根っからそんなこともできぬお人好しで、昨日から何も食っていないというのに照れたような微笑みを浮かべている。作者は、このどん底に落とし込まれた一人の朝鮮人の微笑に、初めて人間の尊厳を感じ、人間不信を恢復する微かな予兆を思うのである。

実は、貴司の文学の基調には、この弱者への共感がいつも底流している。多くの作品の根底に……このモティーフが底流している。

本当は、貴司にとって「唯物弁証法的創作方法」も「社会主義リアリズム」も実はどうでもよかったのかもしれない。貴司が本当にモティーフとしたかったのは弱者への共感と、それを通しての人間回復、人間連帯の夢だったのではないだろうか。

（二〇〇七・二・二八）　2009/10/5 小訂